

「マクベス」における魔女の性格について

小島 信之

Stay, you imperfect speakers, tell me more.

—Macbeth.

「マクベス」の幕が開くと、とたんにわれわれは、雷鳴轟き稲妻閃めくスコットランドの辺境のたゞ中に投げ出される。ここに、いま、囂々たる武勳を立てて凱旋してくる二人の貴族マクベスとバンクウオを待ち構へて、怪し気な予言により彼等を誑かさうと、三人の異様なものが登場してくる。この者達は、「ひどく羨びてゐて、凄まじい身なりで、地上のものとも思はれないが、それでも地上にゐる。生きてゐるものとも、人間が話しかけていいものとも分らないが、それでも話しかければ輝だらけの指を乾割れた唇に当てて分つたといふ仕草をする。見たところ女らしくもあるが、しかし髻の生えてゐるところをみると女だとも考へられない」といつた、何とも会体の知れぬ、薄気味の悪い怪物達である。シェイクスピアは“Enter three Witches”（三人の魔女達登場）といつて、彼等が三人の Witches であることを先づわれわれに紹介してくれてゐる。では、Witches とは

一体何者なのであるか。

試みに「P・O・D」をみると、それは第一に、魔法を使ふ女（古くは、男）であり、次に老人の Hag であり、第三に、妖艶な少女、または婦人である、といふ。

では、Hag とは何であらう。「醜悪なる老婆」である。（詳しくは後出。）してみると、この場面に現れた Witches とは「魔法を使ふ醜悪なる老婆達」であるに相違ない。それならば、別「地上のものならぬ」超自然的な存在などではなくて、当時（十一世紀の中葉。しかし、十七世紀初葉に至る迄もなほ）夥しく実在してゐた、あの巫術や魔法を業とし、人間の運命を占つたり、性の悪い悪戯をしたりする老婆達にすぎないであらう。それは、日本語に普通「魔女」或は「妖婆」と翻譯されてゐる地上の現実的な存在なのである。

ところで、「マクベス」の魔女達は、後の場面で、自分達を Weird Sisters と呼び、マクベスとバンクウオからも同じ名前を語られてゐる⁽⁴⁾。「P・O・D」には、「Weird」といふのは、稀に名詞で「人間の運命」を意味し、第二に形容詞としては、「運

命に關係あるもの」の義である。(例へば、Weird Sisters といふのは、the Fates 即ち、「運命の女神達」である。)また、「超地上的な」「超自然的な」といふ意味もある。「云々と説明してゐる。「運命の女神達」といふのは、周知のとほり、ギリシヤ神話中の「運命を支配する三人の女神達」なのであるが、Weird Sisters といふのはもともとスコットランド語なのであつて、ギリシヤ神話と直接の關聯があるのではなく、むしろその直系の起源は北歐神話に求められなければならない。

では、北歐神話における運命の女神達とはどのやうなものであるか。古スカンディナヴィア語においては the Fates は the Norns に等しかつたのである。そこで Norn といふ語の意義を「ウェプスタア辞典」によつて求めてみると、それは「半女神、または神聖な女巨人」であつて、人間及び神々の運命を支配し、決定する。始めはアングロ・サクソン語で Wyrð、スカンディナヴィア語で Urth と呼ばれるものと同一の神にすぎなかつたやうに思はれる。その性格は「暗鬱な光」で言ひ現はされ、その名は屢々「非業の最期」に等しいものとされた。

後世になつてこれに二つの性格が加はつた。即ち、スカンディナヴィアの運命の三女神である Urth, Verthandi, 及び Skuld の總括的名称になつた。これはそれぞれ、過去、現在、及び未来の意味であつて、それぞれの受持の時間における人間の運命を支配するのである。もう一つは、イングランドにおける、「マクベス」の Weird Sisters によつて代表されてゐる性格である。

これで見ると、Norns がわれわれ人間の運命を、搖籃の初め

から墳墓の終りに至るまで、決定的に支配する超自然的な能力を持つた神々であることは明瞭であり、それがスコットランドに移入されて、Weird Sisters と呼ばれてゐたことも確實である。だが、「ウェプスタア辞典」も指摘してゐるとほり、この Norns の意味の Weird Sisters と「マクベス」の Weird Sisters との間には著しい性格上の相違があるのだ。なぜならば、なるほど魔女達の影響力は強大なものではあるが、マクベスが彼女達から運命を決定的に支配されてゐて、徹頭徹尾その頤使の下に躍らせられる單なる操り人形であるとはどうしても考へられないからである。また、シェイクスピアが、マクベスを、少くとも善惡の選択に關しては自由意志を持つた人間として描いてゐることは明瞭であり、マクベスはそのやうな人格として進んで「自己の不朽の宝を人類共通の敵に与へる」その結果として、この地上で、彼の一身上には破滅を、精神的には地獄を創り出したからである。そもそもシェイクスピア自身が、果して北歐神話の Norns——ひいては、スコットランドの Weird Sisters の意味に通曉してゐたかどうかさへ甚だ疑はしいとされてゐるくらゐなのである。

それなれば、シェイクスピアは、なぜ、魔女達を Weird Sisters といふやうな紛らはしい語で呼んでゐるのであらうか。

この語を、シェイクスピアは、「マクベス」の素材として用ゐた。あの、ホリンシェッドの「年代記」からそのまま取つてきた。そして、ホリンシェッドはまたその同じ語を、ラテン語で書かれたボエチエの「スコットランド史」のベレンデンによるスコットランド語訳からそつくりそのまま取つてきてゐる。それはとも

かく、ホリンシェツドが *Weird Sisters* によつて何を意味してゐたかは明瞭なのであつて、それこそ「運命の三女神」にはかならない。ポエチエは、当時の人びとが、伝説のマクベス物語（もちろん、シェイクスピアの「マクベス」ではない）に出てくる三人の奇怪な女達を、*"Parcas aut nymphas aliquas fatidicas diabolio astu praeditas"*⁵ であると考えた、といつてゐる。この句を、ホリンシェツドは、ヘレンデンよりもさらに充分に、そして綿密に翻譯して次のやうに述べてゐる。

「彼女達は、讀者諸氏がよく口にしてゐられる *Weird Sisters* 即ち「運命の三女神」である。または、専門の魔法に通曉してゐる *nymphs*（水の妖精達）か、*feiries*（妖精達）なのである。

換言すれば、マクベス伝説に現れる三人の女達を、人びとは、スコットランドの伝説で著名な *Weird Sisters* であると考えてゐた。（したがつて、彼女達は、イングランドの讀者に対しては *Godesses of destiny*（運命の女神達）と翻譯した方が適切であらう。）

第二に、彼女達は、上の意味とは幾分違つたもの、即ち *fairies*（妖精達）、或はこれと同じ性格の *nymphs*（水の妖精達）であつて、*Necromantical Science*（巫術）或は *Witchcraft*（魔法）に通曉してゐて、未来を予言する者達であると考えられてゐた。なぜなら、マクベス伝説中のすべての事柄が彼女達の語つたとほりに実現したからである。（したがつて、この意味の魔女達を *Weird sisters* と呼ぶのは適當でない⁶。）

シェイクスピアは彼の *Weird Sisters* を *fairy demons*（妖

精の悪魔達）として、彼女達に魔法の能力を賦与した。してみると、彼は魔女達の性格を、右のホリンシェツドの第二の解釈にしたがつて定めてゐる。にも拘らず、彼はホリンシェツドの第一の解釈にしたがつて *Weird Sisters* の各称を与へたのだつた。この当然の結果として、或る學者達は、シェイクスピアが魔女達を、「運命の三女神」、すくなくとも北歐神話における *Norns* として描いたのである、と信じた。先にも触れたとほり、北歐神話の *Norns* とスコットランド神話の *Weird Sisters* との間には密接な関係があるのであつて⁷、両者はともに邪悪な存在であり、また、何れも妖精国の住人達でもあつたのである。

シェイクスピアが果してスコットランドの *Norns* 的性格の *Weird Sisters* を知つてゐたかどうかは問題である。だが、さらに重要な問題は、シェイクスピアが果して、その魔女達を、「運命の支配者」であると思つてゐたかどうかといふ点なのだ。前述のやうに、主人公マクベスの性格と行為とからしても、彼女達の支配力には限界が見られるが、さらに別の観点からしても、彼女達はその *"masters"*（「師匠達」）を持つてゐるのは、「運命の女神」としてはおかしいのであつて、もし彼女達自身が運命の支配者であるとするならば、どうして彼女達はマクベスの面前でその師匠達を呼び求めるのであらうか⁸。のみならず、彼女達は、彼女達が運命の支配者であるとはどこにも決して語つてはゐない。また「マクベス」中誰一人、（少くとも、*Weird Sisters* といふ語を用ゐることそのことが、とりもなほさず、運命の支配者を意味するのだから）彼女達が運命の女神であることを主

張するものもゐないのである。彼女達が運命の支配者であるといふ学者達の主張は、すべて、シェイクスピアが「マクベス」の中に *Weird Sisters* なる語を用ゐてゐるといふ事実だけに、その根拠を求めてゐるにすぎない。

魔女達は、この世の「美を醜に、また醜を美に変へる」⁽¹⁰⁾といふその本来の使命に忠実に、人間の道徳的価値基準を転倒させようとして努力する。そして、その過程を通じて、彼女達が示すその能力の範囲によつて、彼女達がほかならぬ悪魔——キリスト教の伝統が悪魔の範疇に分類してゐるもの、であるといふその正体を明白に露呈してゐるのである。彼女達はマクベスが悪行を為すやうに誘惑する。そのやり方は非常に巧妙ではあるが、しかし、めざす行為をマクベスが絶体にしなければならぬやうに彼に強制する力は持つてゐないのである。

魔女達はマクベスが将来コーダの領主になり、次いで王位に即くといふ予言はするが、そのためにはダンカン王を殺さなければならぬ、などとは明らかに言つてゐないし、また、仄めかしさへもしてゐないのである。予言者としての彼女達は、マクベスが、

Stay, you imperfect speakers, tell me more.

(I, iii, 70)

待て、半端な物の言ひ方をする奴ども、

もつと話してくれ。

(一幕、三場、七〇行)

と呼びかけてゐるとは、*imperfect speakers* にすぎないので

あり、その「半端な物の言ひ方」によつて、彼を悪行の方へと誘惑する。その悪行に対しては、マクベスは完全に道徳上の責任を負はなければならないのであつて、しかもその責任たるや、たゞ悪行に対してばかりでなく、その種の行為の單なる空想だけに對しても免がれることができないほど完璧なものなのである。

魔女達はバンクウオに対しても意味深重な予言を与へる。即ち、彼自身王にはならないが、しかしマクベスよりも偉大なものになる、なぜならば、バンクウオは代々の王の父になるであらうからだ。かういつて魔女達はまたマクベスにバンクウオ殺戮の邪念を起させるのだが、マクベスが将来バンクウオを殺すといふやうな予言は決してしてゐない。

魔女達は、また彼女達が「師匠」と呼ぶ悪魔達の助けをかりて、幻影により、マクベスにマクダフを警戒せよ、と告げる。マクベスが将来女の腹から生まれなかつた者の手によつて殺害されるであらう、といふこと、また、バーナムの森が、ダンシネエンにやつてこない限りは滅ぼされないのであらう、といふこと等を予言する。また魔女達はこれらの幻影によつてマクベスに恐怖と確信とを与へ、再び彼を殺人の計画へと煽動する。だが、彼女達は、ここでも、将来マクベスが、マクダフの妻やその子を殺すといふことをいささかも予言してゐるのではない。

この魔女達をシェイクスピア時代の悪魔伝説 (*demon lore*) もしくは魔女伝説 (*Witch lore*) に照し合せて解釈してみる場合、多くの事柄が考慮に上せられなければならない。彼女達の悪魔的性格の或る分子に関しては、これ迄に余り考慮が払はれてこ

なかつた。特に、このことは、^{デイルモン}悪魔として、なぜ彼等が^{ウィッチ}魔女と呼ばれるのであるか、といふ理由に關係してゐるのである。

ホリンシェツドは彼女達を、魔女であるとも、醜惡な老婆である、ともいつてゐない。また彼は、彼女達が超自然的存在なのであるかどうかについても明瞭に語つてゐない。ただ世の人びとが彼女達を或る種の超自然的な存在であると考へたといふことを指摘するに止めてゐる。

しかし、マクベス伝説を終るに當つて、ホリンシェツドは次のやうな注目すべき註釈を加へてゐる。

「その治世の始めに當つては、彼は多くの優れた業績を成し遂げ、また、民生の福利増進に対して（讀者諸氏もお聞き及びのやうに）非常に力を尽したのであつたが、後になつて悪魔の仕掛けた錯覚に陥つて、最も戰慄すべき殘虐性を發揮したために以前の名声をすっかり台無しにしてしまつたのであつた。⁽¹⁾」

ホリンシェツドの意味するところは恐らく次の通りであらう。即ち、たとひ三人の女達が超自然的存在に似てゐるとみえたにしろ、マクベスを欺瞞した魔女達は、しよせん悪魔の手先どもにほかならなかつたのである、と。

一六〇五年八月、ジェイムズ一世が王妃と皇太子を伴つてオックスフォードを訪問したとき、聖ヨハネ学院の門前でマクベス伝説に取材した短い劇が上演された。同学院の教授であるマッシュウ・グウィンがラテン語の韻文でその劇を書いたのであつたが、王妃と皇太子のために英語でも同じものが用意されてゐた。この劇では三人の少年達がジェイムズ一世を、「無限に続く王の父」

と呼んで歓迎した。それはもちろん、スコットランド王からイングラント王になつたジェイムズ一世が、己れがバンクウオの子孫であるといふマクベス伝説を信じてゐて、特に、あのバンクウオに対する予言の條りを大いに徳としてゐたからのものであつた。三人の少年達はもちろん女予言者達を代表してゐたのであつて、そのときの彼等の扮装が水の妖精のそれであつたといふ事實は特に重要な意義を持つてゐる。魔女達に關するホリンシェツドの第二の解釈がこゝに適用されてゐるのを見るからである。

翌一六〇六年——これは恐らくシェイクスピアの「マクベス」が初めて舞台に掛けられた年であらうが、この年にウィリアム・ウォーナーといふ人が、マクベスとバンクウオを題材として「イングラントの永続」といふ詩を著した。この詩作とシェイクスピアの「マクベス」との間には何等かの關聯があつたに相違ない。彼は、長年月名君として善政を施した後に俄然暴君に一変した、あの、ホリンシェツドやポエチエのマクベスではなく、シェイクスピアと同様、ダンカン殺戮の直後に忽ち暴君になり、しかも良心に痛めつけられ、自己を責め苛むマクベスを描いてゐる。のみならず、シェイクスピアと同様、（そしてホリンシェツドやポエチエと違つて）彼はバンクウオをダンカン殺戮の共謀者としてゐる。このやうなウォーナーとシェイクスピアとの緊密な相似点からして、ウォーナーが三人の女予言者についてどう語つてゐるかは、特に興味深い点である。彼によると、マクベスとバンクウオに現れた者は三人の Fairies（妖精達）であつて、バンクウオに予言した者は妖精達のうちの Weir-elves（運命の小妖精

達)であつた、といふことになつてゐる。²⁾ これで見ると、ウォーナアが三人の女子言者達を *fairies* もつと詳しくは、*Weird-elves* として眺めてゐたことは明白である。

ウォーナアの *fairies* は、恐らくシェイクスピアの *Witches* とはかなり懸隔のあるものであらう。だが、当時の天文学者であり、医者であり、また魔法の研究家でもあつたシモン・フォーマンといふ人が、もちろん専門家として魔女や妖精に深い関心を持つてゐたのであるが、一六一〇年にシェイクスピアの「マクベス」を見物したとき、この劇に関する短い覚書を残してくれてゐて、その中で彼は魔女達を次のやうに呼んでゐる。「スコットランドの貴族であるマクベスとバンクウオが騎馬で森を通りすぎたとき、突然彼等の面前に三人の女の *feiries* 即ち *nimphes* が立ち現れた……」云々。

フォーマンは恐らく「マクベス」を見る直前か直後にホリンシェッドを読んだであらう。といふのは、キットレッヂも示唆してゐるやうに、「彼の覚書の中で言はれてゐる多くのことが、ホリンシェッドの回想にほかならないから」である。³⁾ 彼はホリンシェッドの典拠からして魔女達を *feiries* 即ち *nimphes* と呼んでゐるやうに思はれる。だが、問題は、フォーマンがどのやうなものを典拠として用ゐてゐるやうとも、彼女達を現にそのやうなものと呼んでゐるといふまさにそのことなのだ。換言すれば、彼は「マクベス」の実演を目撃した際に、その舞台上で彼が見たあの「*Secret, black, and midnight hags*」⁴⁾ (「このことさうろつく、まじ黒な、眞夜中の悪婆ども」)をとして、*fairies* とか

nymphs とかいふ名称が適切であると思つたといふ、その点なのである。疑ひもなく彼は、古代においては *nymphs* と呼ばれ彼自身の時代においては *fairies* と呼ばれてゐたものを意味してゐたのだ。事実、エリザベス朝とジェイムズ朝の作家達にとつて *nymphs* は即ち *fairies* であると考へられてゐたのであつた。そして、また、ここで特に注目すべきは、キリスト教がその体系の中に妖精達を移植しようと試みたとき、彼等を悪魔の階級に区分する傾向があつた、といふことである。シェイクスピア時代の多くの作家はまさしくそのやうな態度を執つたのであつた。

フォーマンは *Witches* といふ語を用ゐてはゐない。それならば、彼はシェイクスピアの超自然的な *hags* が、*fairies* と呼ばれた方が適切であり、*Witches* と呼ばれるべきではない、と考へたのであらうか。恐らくさうではあるまい。といふのは、同時代人のピイター・ヘイリンによるマクベス伝説では、この三人の魔女達は *fairies* 即ち *Witches* であり、スコットランド語では *Weirds* である——として *fairies* と *Witches* とがまつたく同一視されてゐるからである。⁵⁾

ロバート・バートンとトマス・ヘイウッドとは、十七世紀初頭の伝説にしたがつて、マクベス伝説中の三人の女子言者達が悪魔の範疇に区分し得ること、同時に *fairies* もしくは *nymphs* と考へ得られることを主張した。しかも二人とも彼女達を *Water devils* であると規定してゐる。バートンはその著「憂鬱病の分析」の中で次のやうにいつてゐる。

「……*Water devils* とは、これまで川や海に馴染の深かつた

あの naiades 即ち Water nymphs である。パラセルサスが考へたやうに、水は彼女達の Chaos (深淵) であつて、その中に彼女達は住んでゐる。ある者は彼女達を Feries と呼び、Habundia が彼女達の女王である、といふ。彼女達は洪水を惹き起し、圓々船を難破させ、また、Succubae とか色々の仕方て男達を瞞す。

——パラセルサスは、このやうな彼女達、即ち、實在の男達といつしよに棲んだり、結婚したりして数年間仲良く暮したのち、突然秋風を吹かせて彼等を見棄ててしまふ、こんな魔女達についての様々な物語を残してゐる。……そして、また、ポエティウスは、スコットランドの二人の貴族マクベスとバンクウオが森の中をさまよつてゐたとき、このやうな三人の奇怪な女達から彼等の運命を予言されたといふ物語を残してくれてゐる¹⁶⁾。

ヘイウッドは、その著「聖天使の階級」の中で、マクベス伝説をかなり詳細に物語つてゐる。いま簡単に魔女達の名称に関係ある部分だけを引用してみよう。

「……そして、この種の魔女達、即ち White nymphs についてポエティウスはその「スコットランド史」の中で次のやうな報告をしてゐる。——二人の貴族、マクベスとバンクウオ・ステュアートが、彼等だけ騎馬でダンカンの居城へ向つてゐたとき、途すがら(暗い森の中で)びつくりするやうに綺麗な三人の乙女達に出会つた。……」¹⁷⁾

シェイクスピアの「マクベス」中の魔女達は醜惡な老婆達であるが、同時代の妖精伝説にしたがふと、彼女達は、右のヘイウッドの「びつくりするやうに綺麗な乙女達」とまつたく同じ階級に

属する Fairies (妖精達) にほかならないのである。そしてまた彼女達は何れも全く同一の惡魔の範疇に入つてゐるのだ。フォーマンが舞台上の魔女達を妖精として眺めたとき、彼はまさしくその時代の人の眼を以て彼女達を捉へたのであつた。

さて、シェイクスピア時代の妖精伝説に現れてくる妖精達には種々様々の段階があり、たとへば「眞夏の夜の夢」に登場する比較的無害で愛嬌のあるものから、深刻に害毒を及ぼす醜惡な「マクベス」の魔女達に至るまで、千差万別の賑かさであるが、それらのうちでいちばん性の悪い女惡魔達の、またそのうちでもいちばん普及してゐた名前は hag なのであつた。この語はアングロ・サクソンに起源してゐるが、十六世紀までは余り頻繁には用ゐられなかつた。用ゐられ出すと次第に女惡魔達の總称になつてきた。(したがつて、また、最もよく使はれる言葉になつたわけでもある。)その意味するところ、時には、特に子供達を害する fury, lamia, strix に、また時には、睡眠中の人を窒息させると想像された incubus なる nightmare (夢魔) に¹⁸⁾、そして時には、他の特殊の性格を持つものに、また時には、一般に惡事を働くものすべてに適用された。

hag といふ語は、また、ちようど strix といふ語と同様に、人間の女魔法使(即ち、魔女)の意味にも用ゐられた。この点からして、われわれは、妖精伝説が屢々魔女伝説と混り合つてゐること、したがつて超自然的の妖精達と、生きた具体的な人間達である女魔法使達とがお互に一種の親近性を持つてゐたといふことを承認しなければならぬ。時には人間の魔女達はその魔法や千里

眼の能力を授かるために妖精達を訪問することがあると信じられてゐた。その一例をジェイムズ一世はその著「妖怪学」(Demon-ologie, 1597)の中に挙げてゐる。

おもしろいことには Witch といふ語にもまた hag と同じ二重の意味があつた。即ち、エリザベス朝人にとつて Witch とは、妖精国に住む悪魔であるとともに、また、悪魔と親交を結んでゐる人間の女魔法使でもあつたのだ。かくして、シェイクスピアの「マクベス」中の魔女達は、地上に住む醜惡な老婆の魔法使の姿 (Witch, hag) をした超自然の悪魔達 (Weird Sisters) なのであつて、到る処で、あらゆる方法で、彼女達の為し得る限りの悪事を働くのである。だが、現在のところは、特に組し易い男を手玉に取つて、殺人を計画させ、最後にはその男を破滅させようものと肝胆を碎いてゐるのだ。

とはいへ、ウォーナアの Weird-elves が運命の女神達ではなかつたのと同様に、シェイクスピアの Weird Sisters も運命の女神達ではない。また、ウォーナアたゞ一人が、シェイクスピアの同時代人中、この三人の女達を女魔法使であつて運命の女神ではないと考へてゐたのでもない。先に触れたグウィン^{グウィン}の劇に登場した三人の少年達の扮する魔女達は水の妖精達ではあつたが、それはまた Sibyls (女魔法使) であつて、parcal (運命の女神) ではない、と考へられてゐたのであつた。

初期のキリスト教時代に悪魔は imperfect Speakers である⁹と考へられてゐたのであるが、それと同様に、ルネッサンス人にとつて、悪魔は Soothsayers 即ち卜者であると見做されてゐ

たのである。トマス・ミルズの編纂した「古代、近世宝鑑」(一六一三年)といふ書の中には次のやうな問題が提起されてゐる。
——「悪魔達は何等確実な知識も持つてゐないのに果して未来を予言し得るであらうか。」

答は次のとおりである。

——「天使にしる、悪魔にしる、彼等は彼等自身の未来についてと同様に、他人の一身上に将来起るべき事柄については、何も知つてゐないし、また理解もしてゐない。といふわけは、それは、「天にまします神」だけの能力と知識の範囲内にあるからである。天使が未来についての或る知識を持つてゐるといふことは眞実である。だが、それは彼等自身の能力によつてではなくして、神が彼等に啓示を賜ふが故にである。悪魔もまた時には未来を予言することもあり、しかもかなり遠い以前からする場合もあるが、しかしそれはその悪魔の階級が比較的天使に近いか、または悪魔として劣等なものである場合に限つてゐる。それは天文学の知識によつて、人びとが捻り少い不毛の季節や捻り多い豊饒な季節を予言するやうなものである。タァレスが星によつて翌年のオリヴの豊作を予言したやうに、時には悪魔達も未来の出来事を予言することがある。しかし、それは、たゞ魔法の書によつてのみのものである。そして、また彼等の予言は常に逆の結果に帰着してしまふのである。なぜならば、虚偽に眞実を混ぜ合せると、それだけいつそう容易に、彼等の嘘言が眞実であると相手を信じ込ませることができ、またそれだけ容易に目的を達することができ、といふのが、彼等の常套手段であるからだ。同様のやり方

で彼等は、毒物に、酒や蜜やその他の甘いものを混ぜ合せて、致命的な毒物が甘い影の下に蔽はれたり隠されたりするやうにそれを調合するのだ。そして先づ人間達の信用を博したのち、見事に彼等の裏をかき、神秘的な予言の適中にかして成功した場合、彼等悪魔達の満悦は、それこそ一通りのものではないのである⁽²⁰⁾。」

シェイクスピアは、マクベスへの第一の予言が実現して彼がコーダの領主になつたとき、魔女達が右のやうな「致命的な毒物」を「甘い影」の下に蔽ひ隠してゐるのではないか——この場合はもちろん、「致命的な虚偽」に「甘い眞実」を混ぜ合せてゐるのではないか、とバンクウオに疑はせてゐる。

Ban... And oftentimes, to win us to our harm,

The instruments of darkness tell us truths,

Win us with honest trifles, to betray's

In deepest consequence.

(I, iii, 123—126.)

バン。……それに、よくあることだが、われわれを誘惑して縮尻らせるために、

悪魔の手先どもがわれわれに眞実を語つて、

僅かのまことで、人をおひき寄せて、われわれを

最も深刻な結果において裏切ることがある。

(一幕、三場、一二三—一二六行。)

当時、天使や悪魔達にはごく限られた予言の能力しかない、と

信じられてゐた。そのわけは、すべての天使達(地獄に墮ちた天使達をも含めて)や悪魔達は神の被造物にほかならないからである。神の被造物に、神の知り給ふすべてのことに関する知識があると期待することは本末顛倒である。悪魔達は未来に関するすべてを知つてゐると見せかけて人間を信用させ、結果は残酷に裏切ることができた。だが、彼等には人間の自由意志にまで干渉する能力はなかつた。

ヘイウッドが天使や悪魔について次のやうな詩を書いたとき、彼は右に述べた当時の正統思想^{オーストリアン}を、正しく韻律の上に移し植ゑたのであつた。

For, as Angels Creatures bee,

Th'are limited in their capacitie;

In all such thinge as on Gods Powe'r depend,

Or Mans Free-Will, their skill is at an end,

And Understand no further than reveal'd,

By the Creator: else 'tis shut and seal'd.

Hence comes it that the euill Angels are

So oft deceiv'd, when as they proudly dare

To pry into Gods Counsels, and make show

By strange predictions future things to know.

This makes their words so full of craft and guile,

Either in doubts they cannot reconcile,

Or else for certainties, talse things obtruding,

So in their Oracles the world deluding.

(大意。なぜなら、被造物たる天使として、彼等の能力には限りがあるから。神の能力に基いてゐるありとしあるものにおいて、さては人間の自由意志において、彼等の腕前は力を失ふ。そして、創り主によつて啓示されたものより以上を知ることができない。この故に邪悪な天使(悪魔)達は、高慢にも敢て神の計画を覗き見て、奇怪な予言により未来の事どもを指し示すとき、彼等の言葉を限り知らぬ奸智と狡計もて眞実めかし、ために人びとは疑念さへも抱かず、また眼前に突きつけられてゐる嘘つばちなことを眞実であると思ひこんでしまふのだ。このやうにして彼等の予言は世人を瞞着する。)

シェイクスピアのマクベスにはもちろん神によつて定められた運命があるが、魔女達はそのすべてについて知悉してゐるわけではない。彼女達は、神によつてマクベスに予定されてゐる「時の種子を覗き込」む⁽²⁾。そのうちのどの粒が確実に生長するかは彼女達には明瞭である。他の粒については、ただそれが彼女達の希望どほりに生長してくればよいと願ふことができるにすぎない。その希望する種子がマクベスの中で生長するやうにと、魔女達は最善の努力を尽す。そして、もの見事に成功したのであつた。

註

(1) 「マクベス」と、括弧にくるんだ場合はこの劇全体を、また、括弧を外した場合は、この劇の主人公なるマクベス

その人を指す。

- (2) 一幕、三場におけるバンクウオの言葉。
- (3) 一幕、三場、三二行。
- (4) マクベスは三幕、四場、一三三行。バンクウオは三幕、一場、二行。(もつとも、この場合は Sisters の代りに Women といつてゐる。)
- (5) 三幕、一場、六八—六九行。
- (6) Hector Boece, *Scotorum Historiae*. (1527) fol. cclviii
- (7) Raphael Holinshed, *Chronicle* (1587), "Historie of Scotland" Pp.170—171
- (8) シェイクスピアの *Weird Sisters* が Norms 的運命支配の能力を持つてゐるのだといふ説は G. L. Kittredge によつて支持されてゐる。(註(13)の書参照)
- (9) 四幕、一場。
- (10) 一幕、一場、一一行。
- (11) op. cit., P. 176.
- (12) William Warner, *Continuance of Albion's England*. (1606), Pp. 373—377.
- (13) *Macbeth*, ed. G. L. Kittredge (Boston, 1939), P. 240.
- (14) マクベスが魔女達に向つて呼び掛けた言葉。四幕、一場、四七行。
- (15) Peter Heylyn, *Microcosmus or a Little Description of the Great World*, 1629. 参照。

- (16) Robert Burton, *Anatomy of Melancholy*. (1621) P. 64.
- (17) Thomas Heywood, *Hierarchy of the Blessed Angeles*. (1635) P. 508.
- (18) G. L. Kittredge, *Witchcraft in Old and New England*. (Cambridge, Mass., 1929) Pp. 218.
- (19) Mathew Gwinne, *Veritumnus*. (1605) 参照。
- (20) Thomas Milles, *The Treasure of Ancient and Modern Times*. (1613), Pp. 35—36.
- (21) *The Hierarchy of the Blessed Angels* (1635), P. 442.
- (22) 一幕、三場、五八—五九行。